

## 十字架、冬の立ち姿に思う

牧師 山本 護

日本のクリスチャン人口は、カトリックとプロテスタントの全信徒を合わせても1%に足りないらしい。だから牧師が珍しいのでしょうか、私の肩書に目をとめて世間話から宗教問答になったことが幾度もありました。なかでも多かったのが、無神論を自認しながらものすごく宗教的な人、そして「どの宗教でも到達点は同じですよね」と半ば同意を求めてくる人。対話を深めるためには足場の共通性と相違の確認が必要ですが、ほとんどその出発点にさえ立てませんでした。なぜ、対話は深まらなかったのでしょうか。



古代の哲学者ヘラクレイトスはこう語っています。「神は諸々の香気と混交すると変容し、各人の嗜好にしたがって名づけられる」。詩的表象を廃して近代的に読み解くと次のようなことか。「“神は存在する、”という者と“神は存在しない、”とする者との対話は、二人がこの“神、”という語に同じ意味を与えていない以上、往々にして聾者同士の対話となる。また二人が神の存在を認めている場合でも必ずしも同じ意見だとは限らない。“神、”という言葉はそれぞれの人によって大変異なっているから(哲学教程)」。

私たちにとっての神は、漠然として空想が拡がる「宇宙意志」なんかではありません。イエスをキリストと為し十字架にかけ給うた方。これが私たちの信ずる神、信ずる出来事、信ずる約束です。もっと大胆に言ってしまえば、私たちはこの十字架に自分の人生を賭けています。賭博者が確率なんか勘定しないで賭けたその札に関心を集中させるように、十字架は私の隅々を貫いています。

礼拝堂の東側に建てられている原寸大(?)の十字架。八ヶ岳伝道所のさまざまな出来事を身に刻んで印象深い肌合いになっています。そして、やがて朽ち果て、いつか風の強い日に忽然と倒れるイメージが浮かびます。それからどうするか、はどうでもいい。一人ひとりの内にキリストの十字架が貫かれていますから。

いろいろな人たちとの宗教問答、イエスの譬えや愛の行為は共感得られましたが、何より肝心な十字架には相当違和感があるようでした。そういうことから、1%に満たない信徒数というのは、まあ妥当な割合かな、と思います。Ω